

渋谷和邦氏蔵上田秋成資料

長島 弘明

渋谷和邦氏が長年にわたって収集された、上田秋成関係資料を拝見する機会があった。資料は自筆短冊、自筆懷紙、あるいは画賛が中心で、かなりの数にのぼる。貴重な新出の和歌を少なからず含んでいるので、ごく簡単な注記を加え、ここに紹介することとしたい。紹介をご承諾いただいた渋谷和邦氏に、心からの御礼を申し上げる。

一、八曲一雙屏風

翻刻に当たって、歌の頭に通し番号を付しておいた。また、他にどこに出る歌か、浅野三平『増訂 秋成全歌集とその研究』（平成19年、おうふう）等を参考に記したが、語句の細かな異同は注記していない。16、18、23、30、33、34、43は新出歌である。

春夏秋冬の歌数、また各歌の内容と順序から考えて、ばらばらの短冊が後に合装されたのではなく、歌は秋成によつて選ばれ、また配列も秋成によつてなされたと考えてよいであろう。季を定めにくい歌もあるが、『藤簍冊子』等も参考にしながら見てゆくと、四十八首の四季の内訳は、春二十首、夏十首、秋十二首、冬五首、雑一首である。春、次いで秋に比重が置かれ、春の歌では桜の歌が七首、秋の歌は月の歌が四首を占めている。配列は、立春の歌から始まって、春、夏、秋、冬と順次進み、最後にはまた春の到来を告げる歌で終わっている（もともと19の夏歌と20の春歌の順が入れ替わり、「北野賀茂に詣づる記」では冬に詠んだ歌が、24として夏歌の中に置かれているなどのことはある）。歌数にも配列にも一定の意図が見られるが、それを後人の仕業と考

えることは困難で、やはり秋成の意図とすべきであろう。

右隻

(第一扇)

立春

1 なには江や霞わたたりて芹たつのたつかひ見ゆる春の旦
は 秋翁

(好み短冊〔上下朱線引き〕。歌は「藻屑」所収。)

2 ひさかたのはてなき空に朝霞たなひきわたり春たつら
しも 秋翁

(薄青色を漉き込んだ短冊。歌は『藤簑冊子』所収、自筆懷紙もあり。)

3 うくひすは枕のまとに影みえて春日なくさむ竹のした
庵 秋翁

(薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簑冊子』所収。)

(第二扇)

霞

4 あさみとり我まつそめて春の色を野山に見する朝霞か
な 秋翁

(好み短冊。『藤簑冊子』所収。)

5 柳もえ蘆つのくみていにしへのなからの堤人のゆきか

ふ

(無署名)

(『藤簑冊子』、「つゝら文」所収。)

6 大てらの門辺にたてる古柳つちはくまでに枝はたれに
けり 秋翁

(好み短冊。『藤簑冊子』所収。)

(第三扇)

7 こち風のけぬるき空に雲あひてこのめはる雨いまぞ降
くる 餘斎

(好み短冊。『藤簑冊子』、「つゝら文」所収。)

若艸

8 仇守る飛火絶にし春日野にたゝにひ草のもゆるをぞ見
る (無署名)

(『藤簑冊子』所収。別の自筆短冊あり。)

9 みよしのの山に入にし人とへは花には雨もさはらさり
けり 無腸

(『藤簑冊子』、「桜花七十章」所収。)

(第四扇)

10 足柄の山の左倉と仰き見よ高嶺の雪は常消なくに
(無署名)

(桜の下絵の小短冊。『桜花七十章』所収。)

11 山さとはゆふ暮さむしさくら花ちりはそめねと匂ひし

めりて

無腸

〔『藤簍冊子』、『桜花七十章』所収。〕

- 12 須磨の浦の磯山さくら咲にけり波こゝもとにたちくとも見む
無腸

〔『藤簍冊子』、『つゝら文』、『桜花七十章』所収。〕

（第五扇）

- 13 いろにこそ物おもはすれおほけなく国傾けにさける花かは
無腸

〔薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簍冊子』所収。〕

- 14 ゆき暮てひとりのみ見る春のよの月に花ちる志賀の山越
無腸

〔『藤簍冊子』所収。自筆幅あり。〕

- 15 大井河くたす筏の跡たえてゆふへの浪に花散うかふ
秋翁

〔好み短冊。『藤簍冊子』、『麻知文』、『四季風流絵巻』、『秋成歌反古』、『吉野山和歌』、『鶉の屋』所収。自筆幅もあり。〕

（第六扇）

- 16 もゝの花散てうかふは遊びせしたかやり水のすゑにやある覧
桃花
印〔秋成〕墨印

〔好み短冊。新出歌。〕

- 17 ゆふさらすかはつ鳴なりあすか川瀬々ふむ石のころひ

声して

秋翁

〔『藤簍冊子』所収。〕

- 18 峯の雲たゝひとしほの紅にしはしはにはふ春の明ほの春曙
印〔秋成〕墨印

〔好み短冊。新出歌。〕

（第七扇）

- 19 身におはぬつかさの色のかきつ旗さぬにすりつけ思出に着む
無腸

〔薄青色を漉き込んだ短冊。歌の末尾「着む」の「む」は、署名「無腸」の「無」を兼ねる。『藤簍冊子』所収。〕

- 20 神松にかゝれる藤も手は触んいてやひくてふ大ぬさにして
印〔秋成〕墨印

〔好み短冊。『藤簍冊子』、『つゝら文』所収。〕

- 21 宮の内は男をみなも白たへのころもゆゝしき夏は来にけり
夏衣
印〔秋成〕墨印

〔好み短冊。『藤簍冊子』所収。〕

- 22 人つまの是やう月の夏ころもなるれはかふるならひ有
（第八扇）

世に

〔『藤簍冊子』、『反古詠草』所収。〕

無腸

残鶯

23 花はみな羽吹散してうくひすののこれる身とやこゝら

鳴らむ

印〔秋成〕墨印

〔好み短冊。新出歌。〕

松

24 百とせを九のかへりの神垣に千歳の松もおひ次にけり

連印〔無腸〕墨印

〔北野加茂に詣づる記〕所収。〕

左隻

〔第一扇〕

25 されはとて陰たのまれぬ隣かなあふち花さき窓のくら

きに

秋翁

〔『藤簍冊子』、『猷神和歌帖』所収。〕

26 故さとのなからの沼のあやめ艸うへしも長き根をは引

てふ

秋翁

〔『藤簍冊子』、『つゝら文』所収。〕

27 けふもまたよそにとみしを上蔀おろすまもなきゆふ立

の雨

秋翁

〔薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簍冊子』、『つゝら文』、『秋成歌反古』所収。自筆幅あり。〕

〔第二扇〕

28 藤はらの三井のしみつはむすはなん天の香山影もみえ

けり

秋翁

〔薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簍冊子』、『余斎文集』所収。〕

29 風もなき蚊遣の煙なひきあひて暮猶あつき里の中みち

無腸

〔薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簍冊子』所収。〕

なつ草

30 むさしの、はては有けり水ひろき角田かはらのきしの

夏くさ

印〔秋成〕墨印

〔好み短冊。新出歌。〕

〔第三扇〕

31 初秋のあさけの風を身にしめておもふにかなふ比にも

有かな

無腸

〔『藤簍冊子』、『秋成歌反古』所収。〕

32 花々にいろはまけぬる藤はかま野はみなからの香に、

ほひける

秋翁

〔『藤簍冊子』所収。別の自筆短冊あり。〕

33 けふそひく馬のつかさのあゆみまであな面白の駒とい

ふなり

餘齋

(好み短冊。新出歌。)

(第四扇)

八月十五夜

34 けふとまちあすをはかなみ中秋のこよひかつらの花さ
かりなり
印〔秋成〕墨印)

(新出歌。)

35 千さとまて照せる影とゆふなみの汐のたゝへに月さし
昇る
秋翁

(薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簑冊子』所収。)

36 松風のおと羽の山をこえくれは夏ならぬ夜の月澄わた
る
秋翁

(薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簑冊子』、「つゝら文」所収。)

(第五扇)

秋風

37 月きよみこゝ久方の里に来て身にあきかせの吹しめる
かな
印〔秋成〕墨印)

(「藻屑」所収。)

38 たゝならぬ雲のけしきに門たてゝすはされはこそ野分
吹風
無腸

(『藤簑冊子』、「鶉居帖」所収。)

39 みかり野はきのふと過し草むらにいつちのかれてなく

鶉かな

秋翁

(『藤簑冊子』、「秋成歌反古」、「山霧記」所収。)

(第六扇)

40 おもふ事あるとはなしに悲しきは秋のならひのゆふ暮
の空
秋翁

(薄青色を漉き込んだ短冊。『藤簑冊子』、「麻知文」所収。)

41 いふき山させもか草の茂ければ打ちる露も雨とふり
つゝ
無腸

(『藤簑冊子』、「つゝら文」、「余齋文集」、「十雨余言」所収。)

42 何くれと昼は立居る賤の女かさ夜のきぬたをうつつ
の郷
印〔秋成〕墨印)

(好み短冊。「四季二十紙」所収。)

(第七扇)

43 雪こそは時をもしらね秋ふけて不しのしは山いろかは
りぬる
餘齋

(新出歌。)

44 はふり子か清むる跡に木葉散て神のみたらし氷るにけ
り
餘齋

(好み短冊。『藤簑冊子』、「文反古」、「秋成歌反古」所収。自筆幅あり。)

45 広沢の水にうきねてをし鳥のはねきるおとを聞夜さむしも 無腸

(『藤簍冊子』、「反古詠草」所収。)

鶯

46 か、鳴てゆふへはかへる荒わしのつはさにしのく筑波やま風 餘齋

(好み短冊。『藤簍冊子』、「反古詠草」所収。自筆幅あり。)

47 難波江やしに吹冬の浦かせにそむけてひらく梅のはつ花 餘齋

(草花下絵。『藤簍冊子』、「詠梅花五十首」所収。)

祝

48 千早振北野のやしる神松のみとりも梅も立栄ゆらし 無腸

(『詠梅花五十首』所収。)

二、短冊

短冊は幅物に仕立てたもの、未装のものなどが様々であるが、私に通し番号を付しておいた。4、10、17、25、28、36が新出歌。

1 春の夜の雨もる山にやとりして枕にちかき雫をそきく 無腸

(好み短冊。『藤簍冊子』、「つゝら文」所収。)

2 去年よりも姿をみせてけさそ鳴竹のはやしのうくひすの声 無腸

(好み短冊。『藤簍冊子』、「つゝら文」所収。)

蚕養

3 をとめ等が暇をなみにこかひする里の門々春のしつけさ 無腸

(好み短冊。『藤簍冊子脱漏』所収。)

蛙

4 よしの河おろしの風に散うかふ花にまみれて鳴かはつかな 無腸

(好み短冊。新出歌。)

5 あすか川嵐吹そふゆふたちにたきち流るゝ淵せはなしに 無腸

(好み短冊。『藤簍冊子』、「毎月集』、「秋成歌反古」所収。自筆幅あり。)

田植

6 さなへとる時には成ぬをとめ等か難波すかゝさ紐はつ

けてん

無腸

(好み短冊。『藤篋冊子』、「つゝら文」、「秋成歌反古」、所収。
別の自筆短冊あり。)

霞

7 山守のもるてふ山にひくしめのたえくみゆるなひく
かすみに 餘斎

(好み短冊。『藤篋冊子』、「七十二候」、「七十二候新題」、「秋成
歌反古」所収。短冊22、34も同じ歌。)

廬山雨

8 しら雲のうへのいほりと思ひしをよるをすからの雨の
音かな 無腸

(好み短冊。『藤篋冊子』、「反古詠草」所収。)

9 たか恋のつひの夜かれと成ぬ覧けぬかうへふる雪のみ
ちしは 無腸

(好み短冊。『藤篋冊子』、「四季風流絵巻」所収。)

10 ひとへ山へた、らなくに九重の北としいへは風のさむ
けさ 無腸

(好み短冊。新出歌。)

11 むら雨のはる、浅茅の露原にぬれてや秋の風はふくら
む 餘斎

(好み短冊。『藤篋冊子』所収。)

市

12 畝火山木末にさわく朝鳥のさきに群たつ軽の市人

秋翁

(好み短冊。『藤篋冊子』所収。)

13 みちのくにいつか来にけんたならしの琴は緒たえの橋
とこそなれ 無腸

(好み短冊。『藤篋冊子』、「源氏五十四帖」所収。)

水溫満沢

14 水あさき春の山田の岸みれは雨にた、へて波のあや織
る よさい

(「七十二候新題」所収。)

滝

15 おのれよひおのれこたふる山彦は落たきつせのひ、き
なりけり 無腸

(「盆山記」所収。)

春葉

16 はるの、に若なつみにと馬さくり轍のあともあゆみ馴
つ、 無腸

(「手ならひ」所収。17と同じ短冊にあり。)

17 汐船のなけの泊のはなれ島春の緑の磯菜つま、し
(新出歌。16と同じ短冊にあり。従って署名は16と共通。)

18 高砂のをのへにたてる桜花はやも風のさそひやはせむ

無腸

(桜の下絵。歌の末尾「せむ」の「む」は、署名「無腸」の「無」を兼ねる。『藤簍冊子』、「桜花七十章」、「つゝら文」、「秋成歌反古」、「鶉居帖」所収。)

19 夏の野のとほしき風をむかへ入て夜ことすゝしく我庵
せり

無腸

(『草本毎月集』所収。20と同じ短冊にあり。)

20 戸もたてすいく夜の風を迎へ入てやすい夢なき宇治の
橋本)

(『草本毎月集』、「別本毎月集」、「秋の雲」所収。19と同じ短冊にあり。従って署名は19と共通)

21 世にいつる道はたえにし山棲の月のあはれは秋はかり
かは

無腸

(萩の下絵。『藤簍冊子』所収。)

霞

22 山守かもるてふ山に引しめのたえく見ゆる靡く霞に

無腸

(『藤簍冊子』、「七十二候」、「七十二候新題」、「秋成歌反古」所収。短冊7、34も同じ歌。)

月前鹿

23 声のみやひとり月見る窓の前にをのへの鹿の影そ落く
る

餘斎

(『藤簍冊子』所収。自筆幅あり。)

雪鴈声饑

24 ふる雪に鳥羽田ふしみ田埋もれてうゆるか鴈の声あは
れ也

無腸

(『鶉居倭哥集』所収。)

花いまた也

25 二月のめはる桜の木のとをいつとたのめて帰る宮人

無腸

(新出歌。)

嵐山

26 老か世に心とめねはこの春の花に余波の旅寐をやせん

無腸

(『藤簍冊子』所収。)

山

27 見たたせは霞かゝれる山々も名にはかくれぬ大和くに

無腸

はら

(『藤簍冊子』、「岩はし」所収。)

28 ふちか枝のうら葉に花の靡きあひて春ふく風の色をこ

藤花

そみれ

無腸

(新出歌。)

29 宮木ひく柚かかりねの板庇風にあられの音たて、きく

無腸

(蕨の下絵。『藤簍冊子』所収。)

30 かつらきや高まの山の秋かせに月も吹れていさよひや

秋成

する

(自筆幅。)

31 冬枯の野中の里のゆふ煙一すちうすく空になひける

無腸

(薄青色短冊。「鶉居倭哥集」所収。)

山吹

32 やま吹の花のさかりに成にけり春のいとまのおそきこ

としは

無腸

(好み短冊。「手ならひ」所収。)

33 かけるふのもゆる春日の小松原うくひすあそふ枝うつ

秋翁

りして

(『藤簍冊子』所収。)

34 山守のもるてふ山にひくしめのたえくみゆるなひく

霞
色紙・懷紙等に書かれた和歌をここに集める。一枚に複数の歌が記される場合はそれを注記した。なお、この「三、

かすみに

二苦翁

(好み短冊。『藤簍冊子』、「七十二候」、「七十二候新題」、「秋成歌反古」所収。短冊7、22も同じ歌。)

き、す

35 かた岡の小松まじりのつゝし原ありかをみせて鳴き、

すかな

無腸

(「春雨かたみの歌」所収。)

放下士

36 中虚に刃かまつるきのあやとりを八十氏人も駒とめて

見る

(新出歌。)

古事記に春山の霞壮夫といふ語は哥のやうにおほ

えてよめる

37 春山のかすみ男の浅みとりきそはしめしてけさ立ぬら

し

無腸 七十五齡試筆

(大短冊。「鶉居帖」所収。)

三、色紙・懷紙等

色紙・懷紙等」に集めた和歌全体を通しての、通し番号を付した。

1 春の雪あかきにくたきしなのなるすかのあら野の駒い
さむなり 餘齋

(色紙。『藤簍冊子』、「つゝら文」「麻知文」「鶉居帖」所収。) 散はて、その木ともなき冬枯にひと葉名残のいろはみ
えけり 無腸

(色紙。『藤簍冊子』、「反古詠草」所収。自筆短冊もあり。)

花林朧月

3 桜さく春の林は匏形の月のかつらも花曇して 無腸
(色紙。『藤簍冊子』、「つゝら文」「麻知文」「秋成歌反古」所収。)

詠擣衣

4 なにくれとかたりつ、けてあし垣の隣隔てすころも打
声 秋翁

(懷紙。『藤簍冊子』所収。)

5 花に似ぬよしのの山の峯の雲はる、を散と人はいふ也
無腸

(懷紙。6と同一の懷紙にあり。『胆大小心録』、『異本胆大小心録』所収。)

6 秋の雲風にたゞよひ行みれは大幡小旗妹か袴領巾

(5と同一の懷紙にあり。従つて署名は5と共通。『毎月集』、「秋の雲」、『胆大小心録書おきの事』、『異本胆大小心録』所収。)

嵐山夕暁

7 ゆふ波の影ほのみえしさくら花香は夜すからの風にか
をれる 無腸 七十三春試筆

(懷紙。8と同一の懷紙にあり。『藤簍冊子』所収。自筆短冊もあり。)

8 雨もよふふかき霞のひまもれて花にいろかす明ほの、
空

(7と同一の懷紙にあり。従つて題も署名も共通。『藤簍冊子』所収。自筆短冊もあり。)

鷺をよむ 二首

9 かか啼てゆふへは帰るあらわしのつはさにしのくつく
波山風 七十餘齋

(懷紙。10と同一の懷紙にあり。『藤簍冊子』、「反古詠草」所収。)

安房の海の冬のわたりのかしこきにつれとふ鷺の羽音をそきく

(9と同一の懷紙にあり。従つて題も署名も共通。「上田秋成歌卷」所収。)

秋月

11 あまの原あきの夜わたり照月のひかりをさまる明ほの、空
七十三春試筆 無腸

(懷紙。12、13と同一の懷紙にあり。『藤簍冊子』、『山霧記』所収。)

12 秋のつきあふきてのみもありかてに筆のはやしをわけそ煩ふ

(11、13と同一の懷紙にあり。従つて題も署名も11と共通。『藤簍冊子』所収。自筆短冊もあり。)

13 むしのねのさかりの秋のくさ村にうもる、ぬまも月はすみけり

(11、12と同一の懷紙にあり。従つて題も署名も11と共通。『秋月十章』、『浄光精舎にてよめる』、『手ならひ』、『秋成歌反古』所収。自筆短冊もあり。)

詠禁中和歌

14 於母弊騰茂於裳比也八愛武以路二迦仁肥太理乃佐久羅
美疑能多遅婆難 餘斎

(懷紙。『藤簍冊子』、『余斎文集』、『反故詠草』所収。自筆短冊もあり。)

四、(秋の七草七首)

懷紙。本紙三二・三×四六・〇糲。『万葉集』の憶良の歌に見える秋の七草を、秋成が七首の和歌に詠み、一つの懷紙に記したものの。各歌に私に番号を付した。1は『藤簍冊子』所収。2は『藤簍冊子』所収、自筆短冊もあり。3は自筆短冊あり。4は『藤簍冊子』所収、自筆短冊もあり。5は『藤簍冊子』、『胆大小心録』所収、自筆短冊もあり。6は『藤簍冊子』所収、自筆短冊もあり。7は『藤簍冊子』所収、自筆短冊もあり。

- 1 朝露はまたきした葉にきえ残る野寺の庭の秋はきの花
- 2 男花ならぬかたこそなけれ大原や野中ふるみち分まよひては
- 3 夏くすの花の盛と見しほとに葉風うら吹ゆふへ悲しも
- 4 あさ寝髪かきなてし子の花のうへのつゆのいとまもめかれすぞ見む
- 5 をみなへし嵯峨の、はらにほりつれてたか宮つこそ夕いそきする
- 6 花々にいろはまけぬる藤袴野はみなからの香に、ほひけり

7 一日てふそれも榮をあさ露のひるまをまたぬ野への白
花 秋翁（花押）

五、子の日の松画賛（呉春画・秋成詠）

半切。墨画。落款は「呉春」の名の下に、白文朱印「呉春」。秋成の賛は次の通り。『藤篋冊子』所収の「あら玉の年のあしたに」の長歌の反歌。
子の日するのへのこまつにふる雪のしら髪つくまでとしは
つもらむ 餘斎

六、住の江の松画賛（呉春画・秋成詠）

半切。墨画。落款は「呉春」の名の下に、朱文「呉春」。秋成の歌は次の三首でいずれも新出歌。
墨の江の松のむら立来て見れはそなれ汐なれいく代か経け
む

春の日の長居の浦に遊びしてゆふ汐みちぬ松の根毎に住の江の松の梢とよする波いつれみとりの色はふかけむ

餘斎

七、茶瓶自画賛

懷紙。「東坡喜雨然不煮」「無腸七十五齡書」とあり。略画の茶瓶図。

八、散紅葉と鹿の足跡画賛（呉春画・秋成詠）

懷紙。淡彩。散紅葉の画は、表具の一文字や柱のように描かれている。落款は「呉春」の名の下に花押。秋成の賛は、『藤篋冊子』、「麻知文」所収。

くれてゆく秋を、しかの跡とめて谷のした道ふみやまとへ
る 無腸

九、（茶を翫ぶ人に）

懷紙。歌文は次の通り。句読点を補った。落款の印は糸印。

酒にかへて誰いにしへにあそひけむ濁れる世にもすみてあらはや

酒に酔へはにこりて泥の如し。茶にゑへは清みて仙に

通す。すますにこらす、いつれにも酔はてあれかし。
漢の卓茂とか云し人の、我は清濁のあひたをといはれ
しとや。誰もしかこそありたけれ。 水厄道人書 印

十、和 休西先生題東洋法眼絹柳図見寄（大田
南畝筆）

半切。秋成の画賛の和歌に和した南畝の漢詩。『南畝集』
十二所収。享和二年成。一首目の転句、『南畝集』では「面
別無期一水間」。印は「南畝」の朱文の連印。

曲中青玉吟書案 画裏翠楊投旅館 面別難期一水間 春天
日暮雲將散
一水盈々分兩畔 離情綰得垂楊岸 豫知岐岨雪纔消 正是
長安花已散 覃 印

十一、賀新室歌

懷紙。『藤簍冊子』二所収。羽倉信美が自らの敷地内に
小亭を新築したときに贈った長歌と反歌。寛政十一年冬か
十二年春の詠。秋成はこの時、同じ羽倉邸内の別の庵にい

た。

賀新室歌

かけまくも かしこけれども いはまくも あやにたふと
き すめみまの 神の尊の 御心を たひらの宮と 定め
まし み代の嗣々 老松の 千歳なせれば 枝葉おひ 根
はひゝろこり 天雲の 上につとへる 臣達の 末にまゐ
出て 夜の守 ひるのつかへに 雲に乗る 竜の尾をふみ
鵲の 橋をわたりて かしこしと 身もたなしらす 潮
干の 荷田の氏人 いさをあれば 此大宮の とのへなる
鴨の川岸 つきならし 岩根とりなめ 真木柱 え釣壁
草 はこひもて 造れる家は さき艸の さきて真幸く
うみの子の 裔の末まで 住継む 始興せは 大鳥の 羽
かへはせしな 河の辺の いつもの花の いつも栄えむ

ついたつる君かにひ室諸人のほく豊み酒に歌たぬしせな

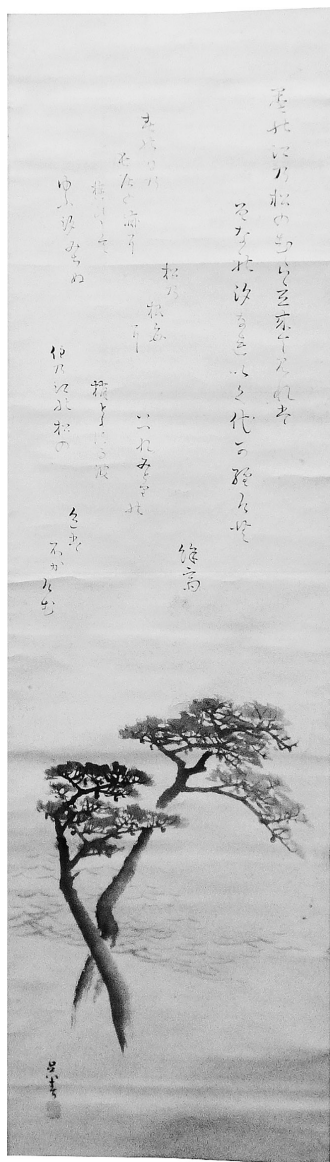
秋翁（花押）

（付記）入稿後、渋谷氏からもう一枚の短冊の複写をお送
りいただいた。「二、短冊」の番号37の後ろに入るべき短
冊である。

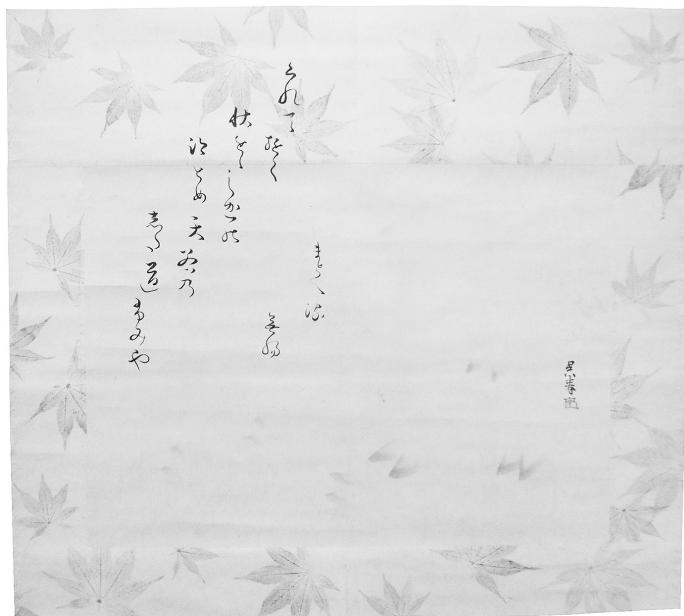
いめはた、あたにそあれかし現にはうき事しけきの

かうへには

(好み短冊。「猷神和歌帖」所収。)



六、住の江の松画賛



八、散紅葉と鹿の足跡画賛